



## 虚構に託された真実

『文鳥』に込められた漱石のころ — 夏目漱石試論 —

深川 賢 郎

---

読むことは創ることです。  
作品のたった一行について  
著者の書かなかったことを  
何百、何千の文字で  
自分の心に描くことです。

この五行は、「私の読書観」の一部である。中高年を対象とする社会人との読書会を続ける中で参加者の読みに触れ、自らの読みを披露する、そんな時間が重ねられてきた。その過程において、私の読みの姿勢と読書への考え方は育てられてきたように思う。

読むことは、作品の世界と読み手の世界が出会い、第三の世界を生み出す営みである。もともと読書行為は著者の表現を受容する行為である。しかし、読者が作品を読んで自分のなかに形成する作品像は、読者の知識や体験、性格、ものの考え方などのフィルターを通過している。著者のイメージと同一の作品像を結ぶことは不可能であろう。

文学作品を深く読むという行為には、読者自身が触発されて生み出す、発見や気づきが入ってくる。その意味で、「読み」はむしろ積極的な行為と言える。とりわけ文学作品の読みは、「攻め」の営みでありたい。作品の言葉の後ろに秘められている著者の意図と出会い、解読する、このことが行われなければ、文学作品の読書は十分とは言えない。読者が作品に斬り込んで創造的に受け止める「果実」が、著者の訴えている「想い」なのである。そこに読者の目が迫るとき、読書のもたらすかけがえのない醍醐味が生まれる。

以下の論考は、『文鳥』を中核とした夏目漱石像の試論（自由な形式で書かれる文学的小論）であり、加えてその過程を読書の実践事例として提案するものである。

漱石に関する研究論文には膨大な資料がある。本稿は、直接漱石の作品に踏み込んで、作品から読み取ることのできる漱石像を捉えようとするものである。作品はあくまで「虚構」である。したがって記述の内容をすべて漱石の実体験として認めることは危険である。けれども荒唐無稽の解釈は避けるとして、論理性を持ち、整合性のある読みをすすめることは、可能であろう。

### ■ 漱石の作品群

漱石の描く多くの作品群は、登場人物と彼らの課題において密接な関係を持っている。たとえば『三四郎』、『それから』、『門』の三つの作品は前期の三部作といわれ、これらの作品の内容は密接に連携しあっている。また、『彼岸過迄』、『行人』、『ころ』の三つの作品も、後期の三部作といわれて同様の傾向を見ることができる。

この外の作品においても、一つ一つは独立したものでありながら、それぞれの作品は、登場人物とその性向において密接な関連をもっている。そのために個々の作品や登場する人物は、大きな一つのテーマを構成するジグソーパズルのピースのように見えてくる。

ここで取り上げようとしている『文鳥』には、これ以後の作品にみられる漱石の心の悩みがみられる。とりわけ、『文鳥』、『夢十夜』、『彼岸過迄』、『硝子戸の中』、『道草』などは、書かれた時期はそれぞれ離れている。けれども作品に登場する人物のモデル像には近似的な姿を読み取ることができる。『文鳥』を解釈するうえで、上記の作品群を「合せ鏡」のように照らし合わせて読んでいくと、『文鳥』のテーマとして漱石の心と生活の課題が浮かび上がってくる。漱石の体験が細やかに開示されているからであろう。

## ■ 『文鳥』の核心

主人公は、三重吉という人物から文鳥を飼うよう勧められる。転居したばかりの空虚な家で気乗りしないが、飼うことになる。世話をするにつれて文鳥の姿に、美しく愛らしい女の姿が二重写しとなって見えてくる。主人公は仕事に振り回され、文鳥の世話も忘れがちとなる。ある日、三重吉からあった相談事で外出する。文鳥のことはすっかり忘れていた。帰宅してみると、文鳥は両足をそろえて籠の底に横たわって死んでいた。

この作品は、文鳥の死をもって物語の終わりを示しているように読むことができる。ところが、読み方によっては、文鳥の死から後ろの部分に作品の核心があるとも考えられる。

主人公は文鳥の死骸を手を、しばらく物思いにふける。しかし、何を思いついたのか、突然、烈しく手を鳴らして下女を呼ぶ。そして、死んだ文鳥をいきなり下女のまえに放りだして、「あっちに持っていきなさい」といって文鳥の後始末を命じるのである。

ここには、それまで流れていた主人公の心理状態の明確な変化が見られる。文鳥を投げ捨てるようにして自分から遠ざける行為は、文鳥の死骸ではあるが（一応死者であって）、その扱いは尋常でない。しかも、この場面における主人公の不思議な心の変化については、何があったのか表現されていない。

『文鳥』と『夢十夜』について、作家の大庭みな子は、次のように述べている。

「いかにも私小説風な本当らしさがあるが、作者は奔放に創っているし、「創作」としての魅力のある世界が出来上がっている。……が、事実の中で真実は語れない、という詩人の苦しみから、小説、文学は生れるのである」<sup>1)</sup>。

「事実の中で真実は語れない」と言っている。この意味は「虚構」によって初めて作者の真意は伝えられるということであろう。漱石は、『文鳥』にどんな「虚構」を描き、その中にどんな「真実」を託したのであろうか。

## ■ 漱石の生い立ち

夏目金之助（漱石）は、慶応3年（1868）に生まれた。明治元年の生まれなので、年号の推移と共に漱石の年齢が読める。父は夏目直克、母は千枝、金之助はその五男である。上には長女佐和、次女の房がいる。この二人は直克の先妻であった琴の娘である。琴は二人を残して病死している。琴の死後、直克は千枝と再婚する。そして長男太一、次男栄之助、三男和三郎、四男久吉、三女ちか、五男金之助が生まれている。金之助は直克の八人目の末っ子である。そのとき父直克は五十歳、母の千枝は四十一歳であった。

金之助は、生まれて半月も経たないうちに里子に出される。母の千枝は、里子に出すことに反対であったが直克が決めた。子沢山であったために、もう子どもが欲しくなかったということが考えられる。ところが漱石の考え方は別であった。生まれたとき母親が言ったという言葉、彼は噂に聞いていた。それは、「こんな年齒をして懐妊するのは面目ない」という言葉であった。高齢出産は恥ずかしいと言ったのである。漱石はこれを重く受け止めている。このことは、作品『硝子戸の中』の二十九節に述べられている。

里子に出された理由が何であったのか、明らかには分からない。いずれにしても、八番目に生まれた男の子は期待されて生まれた子ではなかった。金之助が実の母の乳房を銜み、その胸に懐かれた期間は半月もなかった。

里子に出された先は、「古道具の売買を渡世としていた貧しい夫婦ものであったらしい。私はその道具屋の我楽多と一所に、小さい箆の中に容れられて、毎晩四谷の大通りの夜店に曝されていたのである。それをある晩、私の姉がなにかのついでにそこを通りかかったとき見つけて可哀相とでも思ったのであろう、懐へ入れて宅へ連れてきた」と書かれている。そして姉は父に強く叱られた。翌日、姉は再び金之助を里親の手に戻した。

「私がいつ頃その里から（実家へ）取り戻されたか知らない。しかし、またすぐにある家へ養子に遣られた」（『硝子戸の中』）。

金之助が実家へ取り戻されたのは二歳のときであった。古道具屋に不具合があっただろう。改めて養子に出された。養子先から、たまたま金之助が実家に帰っていたときのことである。次のような出来事があった。

「私がひとり座敷に寝ていると、枕元で小さな声を出す人がいた。はじめは誰かわからなかったけれど、よく聞くと、それは私の家の下女の声だった。『あなたが御爺さん御婆さんだと思っていらっしゃる方は、本当はあなたの御父さんと御母さんなのですよ。先刻ね、おおかたそのせいであんなにこっちの宅を好きなんだろう、妙なものだ、と云って二人で話していらしたのを私が聞いたから、そっとあなたに教えてあげるのですよ。誰にも話しちゃいけませんよ。よござんすか』。私は『誰にも云わないよ』と云ったきりだったが、心の中では大変嬉しかった。その嬉しさは、事実を教えてくれたからではなく、単に下女が私に親切だったからである」（『硝子戸の中』）。

金之助は、このとき初めて自分の実の父母を知ったのである。さらに注目されることは、実の親を知った喜びよりも、親切な下女の配慮を喜んでいることである。下女のことばは、「親との出会い」をもたらししているというのに、そこに歓喜も驚きもない。金之助の情感は、人の誠実な接し方を敏感に感じ分ける子どもになっていたのであろう。

養子に遣られた先の養父である塩原昌之助は、その後戸長（役人）となって浅草に転居する。「それはたしか私〈金之助〉の四つの歳であったように思う。私は、物心のつく八、九歳までそこで成長した。やがて養家に妙なごたごたが起こったため、再び実家へ戻るような仕儀となった」（『硝子戸の中』）。

「そこで」とは、塩原昌之助・やす夫婦の家であった。昌之助は、かつて夏目家で名主見習いをしていた男である。彼も浅草の名主の家に生まれた人であった。妻の「やす」は、夏目家の奉公人であった。金之助の父直克は仲人となって二人を結婚させた。そのとき二人はともに二十九歳であった。

『道草』によると、「島田（塩原昌之助）は吝嗇な男であった。妻のお常（やす）は島田よりもなお吝嗇であった」。「お常はまた飯櫃のはいつている戸棚に、いつも錠を掛けていた」。この描写には幾分の誇張があるかもしれない。しかし、塩原夫婦の生活は貧しかったのであろう。「しかし健三（金之助）に対する夫婦は金の点にかけてはむしろ不思議なくらい寛大であった」。「彼はこの吝嗇な島田夫婦に、よそから貰い受けた一人っ子として、異例の取り扱いを受けていたのである」。

塩原夫妻には、「貰い子である」という強い観念があり、それが健三に対する不安として抱かれていたのであろう。食卓を囲む時、彼ら夫婦がたびたび健三に問いかけた言葉がある。それは、健三の心を信じられなくて、試すものであった。

『お前のお父さんは誰だい』。健三は島田の方を向いて彼を指差した。『じゃあお前の母さんは』。健三はまたお常の顔を見て、彼女を指差した。これで自分たちの要求を満足させると、今度は同じようなことをほかの形で訊いた。『じゃあお前の本当のお父さんと御母さんは』。健三は嫌々ながら同じ答えをくりかえすよりしかたがなかった。しかしそれがなぜか彼らを喜ばした」（『道草』）。

夫婦のこの言動は、健三に大きな疑惑と反感を生み出していた。

「お常がいつこの質問をかけても、健三がさしつかえなく同じ返事ができるように、彼を仕込んだのである。彼の返事は器械的であった」（『道草』）。

金之助は、おうむ返しに教えられた通りを言っていた。その答えには、心がこもっていなかった。「け

れども彼女（お常）はそんなことをいっこうに頓着しなかった。『健坊、お前ほんとうは誰の子なの、隠さずにそうお言い』。彼は苦しめられるような心持がした。時には苦しいより腹がたった。向こうが聞きたがる返事を与えずに、わざと黙っていたくなった。「健三は彼女の意を迎えるために、向こうの望むような返事をするのが嫌でたまらなかった。彼は無言のまま棒のように立っていた。それはただ年齒のいかないためとのみ解釈したお常の観察は、むしろ簡単すぎた。彼は心の内で彼女のこうした態度を忌み憎んだのである」（『道草』）。

健三は、島田夫婦のやり方について腹の内を油断なく見極めなければならなかった。養父母の言葉は親子の信頼を育てることではなく猜疑の種を植え付けた。養父母のやり方は「自分たちの親切を、むりにも子供の胸に外部から叩き込もうとする彼らの努力は、かえって反対の結果を子共の上に引き起こした」（『道草』）。

幼い金之助の心に、人間不信の種がこうして植え込まれていった。見かけ上、「夫婦は健三を可愛がっていた。けれどもその愛情のうちには報酬が予期されていた。……彼らは自分たちの愛情そのものの発現を目的として行動することができず、ただ(健三の)歓心を得るために親切を見せなければならなかった」。（『道草』）

昌之助夫婦には、健三が成長の後に持って帰るであろう収入を当てにして、投資していたのであった。だから、健三が喜ぶおもちゃや絵本を買い与えた。計算の上で行われるこの行為に、健三の心は疎外され、親子の情愛は育たなかった。その結果、「……健三の気質も損なわれた。順良な彼の天性はしだいに表面から落ち込んでいった」（『道草』）。

これが金之助の幼児期の姿であった。人に対して気を許さない、閉鎖性が身についた。彼は孤独の世界に閉じこもるよう自分を追い込んでいった。

昌之助の家庭において「妙なごたごたが起こった」というのは、明治7年（1874）昌之助が、若い未亡人「日根野かつ」という女の家に通うようになったことである。昌之助と妻の「やす」の不和が始まる。やがて昌之助は「かつ」を家に入れた。「かつ」には連れ子がいた。「れん」という、金之助より一歳年上の娘であった。

明治8年（1875）金之助は塩原家に籍を置いたまま、養母の「やす」と共に夏目家に引き取られた。夏目家の父親は、金之助を歓迎していたわけではない。籍はその後も塩原家にあった。そんなこともあって、金之助はその後も塩原家に入出入りしたのである。

『夢十夜』に次のような記述がある。「自分は大変心細くなった。何時 陸へ上がれる事か分からない……こんな船にいるより一層身投げして死んでしまおうかと思った」（第七夜）。これに関して、文芸評論家の柄谷行人は次のような解釈を示している。「漱石の心的な基調となっているのは、こうした行先も帰る先もわからぬ漂流感である。“どこからきてどこへ行くのか”というあの孤独な叫び声をぼくらはここに聞く。ここには……ただ、宙ぶらりんで震えている男がいるばかりである」<sup>2)</sup>

金之助のこの悩みは、自分の安定した居場所もなく、彼の寂しさと不安を助長させた。

#### （補注1）

明治14年（1881）1月、実母（千枝）が死去する。金之助が夏目家に生活して実の母と暮らしたのは、この4年間だけであった。金之助は、進学するために4月より漢学塾「二松学舎」に転校して漢文を本格的に学び始めた。

明治15年（1882）年、塩原昌之助は、金之助の籍がまだ養子のまま塩原家にあったので金之助の将来を見込んで「れん」との結婚を考えた。しかし実現しなかった。

明治17年（1884）9月、金之助、東京大学予備門予科に入学する。

明治19年（1886）金之助は自活を決意し、家を出て江東義塾の教師となる。この年、「れん」は平岡と結婚する。彼女は東京女子師範学校（お茶の水女子大学）に入学し、後に卒業する。その後、「れん」は夫の平岡と共に東京を去る。

明治21年（1888）1月、金之助、夏目家に復籍。前年、夏目家の長男太一、次男栄之助が相次いで病死。三男は病弱のため夏目家の継承に問題が生じたためである。同時に、実父直克は塩原家との交

際を断つ。この年、金之助、東京大学予備門予科を卒業し、本科に入学。専攻を建築科から英語学・英文学科に転科する。

明治22年(1889)、正岡子規にあてた手紙に「漱石」と署名。以後名前として使用する。「漱石」という言葉は、「漱流枕石」(流れに<sup>くちす</sup>漱ぎ、石を枕とす)を誤って「漱石枕流」(石に<sup>くちす</sup>漱ぎ、流れを枕とす)と言ったという中国の故事によったものであろう。

## ■ 『文鳥』の背景

『文鳥』が『大阪朝日新聞』に掲載され始めたのは、「れん」の死後十日たってからであった。このころ、かつて金之助を育てた昌之助は年老いて、一人暮らしとなっていた。

日根野かつは、江戸時代に旗本の御家人の家柄の生まれで、経済的には安定していた。「れん」が結婚し、「かつ」の年齢が高くなるとともに、昌之助との関係は次第に遠くなっていた。昌之助の生活は、「れん」の嫁ぎ先から送られてくる仕送りに支えられていた。

漱石は学問に打ち込み、秀才として世間に認められていった。当時としては破格の出世ともいえる「洋行」(イギリス留学)までしていた。漱石は、昌之助にとって頼ることのできる、手放せない人物となっていた。

昌之助は代理人をたてて漱石に接近し、両家の交際の復活を求めた。そして漱石に生活費の援助を求めたのである。この間の事情は『道草』に述べられている。

すでに亡くなっている実父の直克は、昌之助のこうした人間性を見抜いていたのであろう。後日の憂いのないように、明治21年、金之助が夏目家に復籍するとき、塩原家と夏目家との関係は切れていた。夏目家から、それまでの養育費として金240円を支払い、塩原家との間に「爾後交際出入り等一切御断り及び候」という一冊がつけられている。これに従うと、塩原昌之助から漱石に交際の申し入れをすることは筋違いであった。

『道草』の六十一節で「健三」は「細君」と次のような会話をしている。『お縫いさんは脊椎病なんだそうだ』。『脊椎病じゃあ難しいでしょう』。『とても助かる見込みはないんだとさ。それで島田が心配しているんだ。あの人が死ぬと柴野とお縫いさんとの縁が切れてしまうから、今まで毎月送ってくれた例の金が来なくなるかもしれないってね』。

「健三」は、「お縫いさん」が「成人しない多くの子共をあとへ遺して死んでゆく、まだ四十に<sup>み</sup>充たない夫人の心持を想像に描いた」。

『道草』の「健三」は漱石、「島田」は昌之助、「お縫いさん」は「れん」、「柴野」は「れん」の夫平岡修三と解釈できる。島田はお縫いさんとの関係を重視し、老後の生活費をお縫いさんの夫である柴野から受けていた。

これで見ると「れん」は脊髄カリエス(結核菌による脊髄の病気)になっている。当時、この病気は不治の病であった。若くして病魔に追い詰められていく「れん」を、健三は心を痛めながら思いやっている。

### (補注2)

病んで弱っている「れん」を思わせる娘は、他の作品にも見ることができる。

「その娘さんは蒼い色の美人だった。そうして黒い眉毛と黒い大きな瞳<sup>まぶた</sup>を有<sup>あ</sup>っていた。その黒い瞳は始終遠くの方の夢を眺めているような恍惚<sup>うつつり</sup>と潤<sup>うるお</sup>って、其処<sup>そこ</sup>に何だか便りのなさそうな憐<sup>あわれ</sup>をただよわせていた」(『行人』〈友達〉三十三節)。

「蒼い色の美人」というのは、色白の顔であるが、結核などの病気のために、蒼白になっていたのであろう。この作品では、精神病となっているが、はやく亡くなっているところを見ると、このモデルは結核であったのかもしれない。脊髄の病気を患っていた結核の「お縫いさん」とイメージが重なる。

この部分は「三沢」という人物の印象に強く残っている娘として友人に語った場面である。三沢は漱石と思われる人物で胃病を患っている。この娘は結婚に失敗している。従順で控えめな人で懸命に

夫に尽くした。しかし、夫の勝手な振る舞いに堪えかねて精神を病んだのである。その後間もなくこの娘は死んでいる。

『文鳥』には、漱石の身辺にあったこのような背景が描かれていない。しかし、著者にとっては堪えがたい現実が渦巻いていた。異母きょうだいとして育てられ、不幸になっている「れん」の生活ぶりは、漱石にとってつらいことであつたであろう。

『道草』に述べられているように、彼は「れん」を恋人として受け止めていたのではない。しかし、「れん」の結婚生活には関心を抱いていたと思われる。「れん」の夫である平岡は結婚した当時、陸軍中尉であつた。彼の風貌は「肩の張った色の黒い人であつた。目鼻立ちからいうとむしろ立派な部類に属すべき男に違ひなかつた」（『道草』）。「健三は一度その新宅の門をくぐつた記憶を持っていた」。「隊」から帰つた平岡は「長火鉢の猫板の上にあるコップから冷や酒をぐいぐい飲んだ。お縫いさんは白い肌もあらわに、鏡台の前で髪を撫でつけていた」（『道草』）。平岡が妻の「れん」に求めたものは美貌であり、自分に従う従順な「女」でいることだつたのだろう。「れん」は、堪える女でもあつた。

## ■ 文鳥の正体

「健三」の眼に映る「お縫いさんは、すらりとした格好のいい女で、顔は面長の色白という出来であつた。殊に美しいのは睫毛の多い切れ長のその目のように思われた」（『道草』）と描かれている。文鳥が来てはじめての朝、主人公が真っ先に注視したのは文鳥の眼であつた。「文鳥は白い頸をちょっと傾けながらこの黒い眼を移して初めて自分の顔を見た。そしてちちと鳴いた」。「ちちと鳴く。そうして遠くから自分の顔を覗き込んだ」。

『夢十夜』の「第一夜」の夢に、女は死ぬと言って男と次のような会話をしている場面がある。「もう死ぬのかね、と上から覗き込む様にして聞いてみた。死にますとも、と云いながら、女はぱっちり眼を開けた。大きな潤のある眼で、長い睫に包まれた中は、只一面に真黒であつた」。文鳥の眼とこの女の眼とはまったく同じである。

これらの作品において、美しい眼、黒い大きな瞳が注目されている。これは、あるいは「れん」の面影であつたのではないだろうか。

文鳥がエサを食べ始める。「静かに聴いていると、丸くて細やかで、しかも非常に速やかである。堇程な小さな人が、黄金の鎚で瑪瑙の基石でもつづけ様に敲いているような気がする」。この透明感のあるイメージは宝石のような美しさと純粹性をもっている。この描写は、文鳥の姿が格別に美化された内容として描かれている。

このように美化されたイメージは、他の作品にも事例を見ることができる。

『ころ』の「先生」が下宿の「お譲さん」に好意を抱いたときの気持ちは、つぎのように述べられている。「私は、お譲さんの顔を見るたびに、自分が美しくなるような気持がしました。お譲さんのことを考えると、気高い気分が自分に乗り移ってくるように思いました」（『ころ』下「先生と遺書」十四節）

『彼岸過迄』において、「千代子」について主人公は言っている。「（千代子から）どれほど烈しく怒られても、僕は彼女から、清いもので自分の腸を洗われたような気持のした場合が今までに何遍もあつた。気高いものに出会つたという感じさえ稀には起こしたくらいである。僕は天下の前にただ一人立って、彼女はあらゆる女のうちでもっとも女らしい女だと弁護したいくらいに思っている」（『彼岸過迄』）。

女性に対する人間を越えた修飾表現は、無意識の裡に「れん」のもっていた印象の美しさを賞賛する言葉となっているのかもしれない。

文鳥と女の結びつきはさらに深まっていく。作品『文鳥』の表現に次の描写が見られる。ある朝、籠をのぞくと文鳥は「心もち首をすくめて、自分の顔を見た」。それに触発され、彼は「昔、美しい女を知つていた」と展開する。「この女が机にもたれて何か考えている所を、後ろから、そつと行って、紫の帯上の房になつた先を、長く垂らして、頸筋のほそいあたりを、上から撫でまわしたら、女はものうげに後ろを向いた。その時女の眉は心持八の字によつていた。それで目尻と口元には笑いが萌していた。同時に格好の好い顎を肩まですくめていた。文鳥が自分を見たとき、自分はふとこの女のことを思い出した」。

この描写には、文鳥に「女」を重ねて思い出しているところがうかがえる。塩原家にいた当時、金之助は「女」を異性として強く自覚してはいたのではなかった。しかし、彼女に淡い憧れを抱いていたと思われる。带上の房の先で、そっと女の首筋に触れたことは、自分の存在に注目して欲しいという彼の願いだったのである。そのとき彼の心の裡に未熟な恋の命が灯っていたことを、彼も「女」もまだ気づいていなかった。

『文鳥』には次のような思い出も描かれている。「女」が「座敷で仕事をしていたとき、裏二階から懐中鏡で女の顔へ春の光線を反射させて楽しんだことがある」。これも「女」の注意を引こうとする悪意のないいたずらといえる。

「女」はそのいたずらを咎めていない。その姿には、少年のいたずらを優しく受けとめてくれる異性が見える。彼女の姿に、少年はこれまで味わったことのない母性の持つ甘い包容力を感じていたのであろう。

これ以外の作品にも、この「女」と思われる人物を暗示する描写が見られる。「僕は今まで気がつかずに彼女（千代子）を愛していたのかも知れなかった。あるいは彼女が気づかないうちに僕を愛していたのだろうかと考えて、しばらく呆然としていた」「とにかく僕と千代子のあいだには、両方とも物心つかない当時から、すでにこういう絆があった。……余りに自分に近すぎるためか、甚だ平凡に見えて、異性に対する普通の刺激を与えるには足りなかった。これは僕の方ばかりではない。千代子もおそらく同感であろうと思う。その証拠には、長い交際の前後を通じて、僕はいまだかつて男として彼女から取り扱われた経験を記憶することができない」（『彼岸過迄』）

「千代子」に対して主人公は強く引き合う関係を振り返っている。「余りに自分に近すぎるためか」という表現は、まぎれもなく金之助と「れん」の関係を思わせる。

文鳥に懐かしい女の顔や姿を思い浮かべることが、極めて自然な心の動きと言えよう。「れん」は金之助の幼いころの、淡い初恋の人だったのである。

## ■ 文鳥の死

『文鳥』の展開によると、ある日、三重吉との話し合いから帰ってみると、「文鳥は籠の底に反っくり返っていた。二本の足を硬く揃えて、胴と直線に伸ばしていた」。文鳥は、死んでいた。彼はそっと握って籠から文鳥を取り出す。

「自分は手を開けたまま、しばらく死んだ鳥を見詰めていた。それから、そっと座布団の上におろした。そうして、烈しく手を鳴らした。十六になる小女が、はいと云って敷居際に手をつかえる。自分はいきなり布団の上にある文鳥を握って、小女の前へ放り出した」。

この場面は文鳥の死骸を前にして、主人公が強い情動に駆られた場面である。文鳥を見つめ、沈黙の時間のあったことが記されている。しかし、ここには「しばらく死んだ鳥を見詰めていた」とのみ記されている。次の瞬間「烈しく手を鳴らした」。この空白の時間に何が起きたのだろうか。

この謎を解くカギは、『文鳥』の終わりの方にある。それは三重吉から受けていた相談事である。作品では挿話として、文章の展開とは無関係な「例の件」と書かれている。その内容は、誰かわからない若い娘の結婚に関する相談であった。

「いくら当人が承知だって、そんな所へ嫁に遣るのは行末よくあるまい、まだ子供だから何處へでも行けと云われる所へ行く気になるだろう」と述べられている。これは三重吉の相談に対する主人公の独り言である。ここには「若い娘」の結婚を親の思惑で進める人たちに対する批判、それに巻き込まれていく娘の姿を読み取ることができる。一見不要な夾雑物のように書かれているこの部分が、実は『文鳥』解釈の重要な『キー』となっていると考えられるのである。

「若い娘の結婚」について考えてみよう。「れん」の嫁いでいった平岡修三の家庭はどうであったのか。『道草』の主人公は、「お縫いさん」の新婚家庭を訪ねている。すでに述べたように、そこで「僕」が見たものは、夫が冷や酒をコップで飲んでいる姿であった。「お縫いさん」の生活ぶりは「僕」の予想と大きく反したものであった。

『文鳥』の主人公の言葉「一旦行けば無暗に出られるものじゃあない。世の中には満足しながら不幸に

陥っていくものがたくさんある」は、『道草』の「お縫いさん」の結婚に反映されている。経済的には恵まれていたが「お縫いさん」のころは満たされていない。

「お縫いさん」に置き換えられている「れん」は、本来、勉強を好む地味で堅実な性格であった。平岡と結婚した後、彼女は東京女子師範学校（お茶の水女子大学の前身）を卒業している<sup>3)</sup>。それには日根野かつの影響もあったのであろう。しかし、「れん」は師範学校で学んだ資格を生かす機会を得ることはなかった。

「れん」は聡明であり、従順で辛抱づよい女であった。しかし、彼女は結婚生活の中で変えられていった。夫の求めに従い、夫の好む女に仕立て上げられていった。彼女は自分の願いを封印し、言いたいことも飲み込んで、ひたすら夫に従ったのである。先に述べた「三沢」の出会ったという精神異常の「娘」が思い起こされる。

『文鳥』の終わりのあたりに「たのみもせぬものを籠へ入れて、しかも餌を遣る義務さえ尽くさないのは残酷の至りだ」という表現がある。「たのみもせぬものを籠へ入れ」とは、文鳥の意思を無視して「籠」に閉じ込めることである。このことは、夫の支配下におかれ、夫の言いなりに従っている女の姿を暗示している。

「餌を遣る義務」ということは、文鳥に生きるための餌を与えることである。が、嫁いだ「女」に置き換えて読むと、「女」にふさわしい、幸福追求の生き方を提供することを意味する。しかしその「女」には、学問を生かすこと、幸せを追求する生き方は与えられなかった。そのことを、『文鳥』の主人公は「残酷の至りだ」と言っている。

「自分は手を開けたまま、しばらく死んだ鳥を見詰めていた」。その間、彼は無言で動かない文鳥の死体に哀れな「女」を見ていた。それは文鳥の哀れを悼む姿である。

## ■ 金之助の幼児体験

金之助の不幸な人生は、すでに「金之助の生い立ち」で見えてきた。その生い立ちで最も重要であったことは、幼くして「母の愛」に出会っていないことである。

一般に、幼児体験の大切なことは、三つ子の魂と言われ、その影響の大きなことが指摘されている。『ピアジェ博士の育児書』には、次のように述べられている。「赤ちゃんの最初の学習が行なわれるのは、抱かれて乳を飲まされ、親密な母子関係のなかにある瞬間においてです。だから乳を飲んでいて赤ちゃんをないがしろにしないことが、そして彼に決して瓶（哺乳瓶）だけをくわえさせないことが極めて重要なのです」。「母親をおぼろげに知り始めることは、マーラーのいう symbiosis（共生・共に生きることを意味するギリシャ語）の始まりです。この段階では、赤ちゃんは自分と母親とが全能の体系のように“一つの共通の境界を持った二重の統一体”のように行動し、機能します。……自己中心性を備えた赤ちゃんは、自分のお母さんを自分の一部とみなす、ということです<sup>4)</sup>

乳幼児は、本来、母と子の二つの体で構成される二つの独立した人格である。それでいて一つの統一体として受け止められる認識から出発する。別々のものでありながら一つのものという「二重の統一体」の重要な意味が述べられている。母親を取りこんだ自己意識の確立、ここから子どもの自信と他者への信頼が生まれる。それはやがて幼児の自立なり、一人歩きをする勇気を獲得するための基となる。母親の胸に抱きしめられ、互に見つめ合うアイコンタクトは、幼い子どもの教育の出発点となる。

すでにみてきたように、金之助の幼児期の体験は、「道具屋の我楽多と一所に、小さい衆に容れられて、四谷の大通りの夜店に曝されていた」のである。里親は、貧しくて多忙であった。仕事にかまけて、人々の通る店先に置くほかなかったのである。

金之助のもう一つのみじめな思い出は、養父母（塩原昌之助夫婦）から受けた心の傷である。養父母からは人間不信の種が擦り込まれた。『道草』で見えてきたように「順良な彼の天性は次第に表面から落ち込んでいった」のである。実の子に、「おまえの母は誰か」などと確かめる親はいない。この人たちの手によって埋め込まれた他者に対する警戒心、いつも他人の心を忖度する心の営みは、成長と共に金之助の人格形成を大きくゆがめた。



母親の子育てに果たす役割について、大学教授であり医師でもある平井信義は、その著書『「心の基地」はお母さん』において、次のように述べられている。

生後六か月の間に、母子のあいだにおいてその子の情緒的な基盤ができる。そして「心の基地」は一歳から三歳の間の母子関係がもっとも大切な時期に当たる。「心の基地」というのは、幼児が安心して身も心も託すことのできる母親を意味している。「心の基地」は、あらゆる外敵から守られる安心の場所なのである。この基地によって幼児の情緒は安定し、人格の基盤が座る、ということである。<sup>5)</sup>

漱石の生い立ちは、この点から見ると、きわめて不幸であった。彼の体験は彼の心に隙間を作っている。この不幸な体験は、成人後にも漱石の心の傷として、人間不信をテーマとする漱石の作品群を生み出すことになったと考えられる。

いくつかの例を挙げてみたい。

『行人』の登場人物である一郎は、弟の二郎に言っている。「現在、自分の眼前にいて、最も親しかるべきはずの人（自分の妻）、その人の心を研究しなければ、居てもたってもいられない」。これは、妻が弟の二郎に好意を抱いているのではないかという不信感を述べたものである。妻を信じることができない。そのために「妻の心を研究する」というのである。一郎は、その証を得るために自分の妻と二郎を旅行に行かせている。

『こころ』の「先生」について「人間を愛しえる人、愛せずにはいられない人、それでいて自分の懐ふところに入ろうとするものを、手をひろげて抱きしめることのできない人、——それが先生であった」という。『こころ』の主人公は、尊敬する「先生」のなかに、他者への警戒と不信感が存在していることを述べている。

これらの作品には、漱石の幼児体験の影が強く刻み込まれていることをうかがわせる。

## ■ 漱石の憤り

文鳥の死に出会った主人公の場面に戻ってみよう。主人公は文鳥の死を認め、哀惜の情に包まれたことは、先に述べた。それは、文鳥の冷えた死骸によって湧き出してくる「れん」の姿であった。しかし、死骸となった文鳥を若い下女に投げ与え、どこでもいい処理するようにと命じた時、文鳥への哀惜はすでになく「憤り」へと変わっている。

ここでもう一度思い出さなければならぬ言葉は、「たのみもせぬものを籠へ入れて、しかも餌を遣る義務さえ尽くさないのは残酷の至りだ」という文言である。それは、「れん」を思わせることばであった。しかし、漱石自身の生い立ちに繋がる言葉でもあった。

その心の流れは次のような経過たどったと考えられる。

《文鳥の死》→《れんの死》→《漱石自身の生い立ち》

文鳥の運命は他者の手に操られ、命まで支配された。この無残な生き方は「れん」の結婚後の生き方にも通じるものであった。このことの延長としてその奥に漱石は自分の生い立ちの姿を見たのであろう。それは、生々しく現在も引きずっているのである。

漱石の人生の出発点は、心の傷となってその後の彼を苦しめた。個人史に刻まれている度重なる神経衰弱は彼の内から生まれたものである。彼はその痛みを正面から受け止めた。苦しみを誤魔化すことも逃避することもしなかった。この生き方から生まれた「孤独」と「猜疑」は、漱石の生涯の課題となっている。人間関係のはざまで迷ったり憎んだり、それを乗り越える姿がそこに生じた。文鳥の死に、自分の姿を見たのである。

彼の書いたほとんどの作品に、自分の苦悩と周辺の人々を描いた。虚構に託して赤裸々に書いた。そのモデルとなる人びとが具体的な場面の中に登場している。そのために多くの作品群には、似通ったモデルが変形されながら描かれている。彼の作品に登場する人物（ピース）は微妙につながっており、多くの作品群は、全体として一つの大画面を構成している。いわば、漱石の人生というジグゾウパズルを形成している。

文鳥が死骸となって無言の沈黙を見せている。その虚しい姿を手の中に見つめるとき、漱石は自分自

身をそこに見た。文鳥に「れん」や自分の人生を投影したのである。

## ■ おわりに

漱石の優秀な頭脳は、英語学・英文学の学者として人々を惹きつけた。学問の世界を切りひらき、強靱な理性と思考活動において、彼は自らの人生をより良いものにするための努力をした。しかし、学問の世界と心の世界を、止揚（矛盾したものを統一して高いものに引き上げる）して、彼の人生を刷新することは不可能であった。人間としての生き甲斐と他者への信頼という基本に立ち返るとき、彼の精神に刻み込まれた傷は、癒されることもなく、新しく蘇生することも叶わなかった。

多くの人から尊敬され、注目された漱石であった。彼は日本を代表する学問の府、全国の秀才を育てる東京帝国大学を辞職し、文筆に生きることを目指した。大学の学長は彼の才能を惜しみ、再度、大学に復帰することを要請している。彼はそれを断った。また、京都帝国大学からも講師として招聘の声が掛けられた。この呼びかけも辞退している。文学博士の称号も辞退した。人々は、彼のこのような生き方に様々な反応を示した。それでも彼の生き方と価値観は一貫していた。人間追求の道を歩むという姿勢が揺らぐことはなかった。

そこには、心の充足と生き甲斐を求めて、自分の在り方を追求する人生が選択された。彼が選んだ道は、朝日新聞社に社員となって小説を書くことであった。

なぜ彼はその道を選んだのだろうか。それは多分、文学作品を創作することによって、自らの内面から込み上げる重荷を作品として吐き出したかったのであろう。作品を書くことによって、自らのジグゾウパズルを完成させたかったのかもしれない。

漱石は作品の中に自らの思索と体験を書き出すことで、その苦しい内圧を軽減し、自らの本来あるべき姿を求めた。そこには彼の誠実で強靱な知性の営みがあった。彼の苦悩は、文学作品として昇華していったのである。

漱石の文体は淡々としている。しかもリアルに自分の生活を描いている。彼は湧き出てくる葛藤を胃潰瘍という自損の営みに置き換えつつ、自らを切り刻んでいった。

多くの読者はその文体の持っている生々しい虚構に親近感と魅力を感じた。彼は作品のなかに自分の心の生活をありのままに、丁寧に書き込んでいった。虚構に託しつつ生み出される作品に、漱石は自分の血の通った真実を吹き込んでいったのである。そのために、多くの読者は、作品の内容を自分の体験と重ねて読んだ。ある時は自分の言葉に翻訳して読んだ。漱石の体験を自らの体験として共感することができた。そこに、読者は大きな癒しを得ているのである。

しかし、自らの課題に正面から取り組む仕事によって、漱石自身は痛んでいった。そして重い神経衰弱に悩んだ。身を刻むようにして受け止めた精神の痛みは胃潰瘍の重篤化をもたらし、肉体的に彼の生きる力を奪っていった。彼の最後の作品となった『明暗』は完成を待てなかった。彼は傷心のまま人生を閉じたのである。

夏目漱石は死の翌日、偉大な才能の持ち主として東京帝国大学医学部において解剖に付された。脳の重さは1425グラムであった。日本人男性の平均を上回っている。脳と胃の臓器は大学に寄贈され、エタノールに浸された。それは現在も赤門の奥にある東京大学医学部の資料室に保存されている。エタノールの中で、漱石は果たさぬ夢をいまでも追いつけているのであろうか。(2016.11.25)

## 注釈

- 1) 『群像 日本の作家1・夏目漱石』(小学館) 1991  
大庭みな子 [『文鳥』『夢十夜』と『坑夫』—文学における我と非我]・p.132
- 2) 『群像 日本の作家1・夏目漱石』(小学館) 1991  
柄谷行人「内側から見た生——漱石試論」p.28
- 3) 山口謡司『となりの漱石』(ディスカバー携書) 2015 p.40

- 4) M・A・フラスキー・和久明生訳『ピアジェ博士の育児書』洞文書院・1986
- 5) 平井信義著『「心の基地」はお母さん』企画室・1984

#### その他の資料

- 〔人間関係〕・原武 哲『夏目漱石 周辺人物事典』（笠間書院）2014
- 〔年表等〕・『群像 日本の作家1・夏目漱石』年表（小学館）1991
- 〔対象作品〕・夏目漱石『文鳥・夢十夜』（新潮文庫）
- 〔参考作品〕・夏目漱石『夏目漱石全集』（岩波書店）・（新潮文庫）